和「古今集」等の古典注解書類を閲覧させることにより、その性質の一端を確認しようとするものである。

二 『げに』の用字「勝」

室町時代第書に、副詞『げに』は次のように見える。『はく』は割注を示す。以下同。

管見に於ては、室町時代以前の辞書には『げに』は見出せず、この時代になってはじめて辞書に採録された語であると考えられる。

右のうち『実』、『現』などは現在にも通用する用字であり、漢字の字義を和語の意味とあだに類語はない。また『誠』は『実』と訓を同じするところから、通用を類推される。

『太平記』元繁本第三二一国勢上洛之事。前田有岐は『經聞文庫』編刊、勉誠社、以下、引用には、私に雅の思考本に次のような例を見出される。

或役所ノ者ニ下ニ、是ヲ問付テ、大勢ニ得ニ此ヲ通ルハ誰レノ。検者カゲ、卜答ケレバ、誠ノモト謂へ音ト、又問コ

ノ場合ニハ、字義と訓のあだに距離があるが、『勝』の通用の訓である『もっとも』を介在させれば、『げに』の用字となる過程は推察できる。

これらの用字に対して、『勝』の用字は、その字義と訓のつながりの根拠が見出しにくいように思われる。先 cargar する古辞書において『勝』は次の如くである。

（注）『古今集』巻二、『不老不死』（宴曲集）。
尊経閣文庫本は、現代の用字法から見ると、やや奇異な用字を有し、
【箋用集】などに登録のある表記を多用している点を特徴とする。
その例の一つと言ってよいであろう。また、時代は少し下るが、
本典古全集【箋曲集】では、この用字が珍しくない。

春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものはどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の、
春たや、勝ものどきざなきの、
〈溢の真砂も吹上の。
奥義抄・古歌詞、和歌初学抄
由緒詞は、当代には意味のわた
りにくくなっていった歌詞を挙げて、略注を施した箇所である。奥義
抄・古歌詞前半の三三語は、その末尾に「は已見万葉集」とあり
て、「万葉集」における用字を示しており、『に勝（勝）』に勝
もその中に
にの表記例は、仮名書きの「家譜」が二例見える以外は「異」が
圧倒的に多く、他に「異論」や「異」が二例ずつ見えるにすぎな
い。では「に勝（勝）」の説の根拠は「万葉集」以外のところにあ
るのかというと、そうではなく、やはり「万葉集」の訓読にあるよ
うと思われる。

秋田潤川辺細目人不願回公無勝

結句「きみなしがちに」「ま
なしがちに」「古今六帖」三六七、三〇三九番。新編国歌大観

細井本、京大本左訓を「ツマナシカチニ」西本願寺本左訓、温故堂

本左訓等の訓が行われていたようである。"万

葉集"四七七番歌を西本願寺本により示す、以下の通り

である。

の歌を録取する諸書において、結句は「きみなしがちに」「ま
なしがちに」「嘉暦承本」「ツマナシカチニ」「神宮文庫本、

抄「つままきかけに」「類聚古集」「ツマナシカチニ」「神宮

略類聚」「ツマナシカチニ」「茨城文庫本、

細井本、京大本左訓を「ツマナシカチニ」西本願寺本左訓、温故堂

本左訓等の訓が行われていたようである。

結句「きみなしがちに」「ま
なしがちに」「古今六帖」三六七、三〇三九番。新編国歌大観

細井本、京大本左訓を「ツマナシカチニ」西本願寺本左訓、温故堂

本左訓等の訓が行われていたようである。

の歌を録取する諸書において、結句は「きみなしがちに」「ま
なしがちに」「嘉暦承本」「ツマナシカチニ」「神宮文庫本、

抄「つままきかけに」「類聚古集」「ツマナシカチニ」「神宮

略類聚」「ツマナシカチニ」「茨城文庫本、

細井本、京大本左訓を「ツマナシカチニ」西本願寺本左訓、温故堂

本左訓等の訓が行われていたようである。
四
歌語「けに」の注釈と「けに」

【奥義抄】
古歌詞は、前述の通り、和歌初学抄と異なり、通名名、八雲抄の世俗用、世俗・俗用、世俗用を含むことが頭部において用いられている。`古今集'の『万葉集』が用いられたのではなかろうかと考えられるのである。

【歌詠・歌詠】
和歌の表記は、前述の通り、和歌初学抄を含むが、通名名、八雲抄の世俗用を含むことから、通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。

【歌詠・歌詠】
和歌初学抄の通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。

【歌詠・歌詠】
和歌初学抄の通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。

【歌詠・歌詠】
和歌初学抄の通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。

【歌詠・歌詠】
和歌初学抄の通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。

【歌詠・歌詠】
和歌初学抄の通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。

【歌詠・歌詠】
和歌初学抄の通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。

【歌詠・歌詠】
和歌初学抄の通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。

【歌詠・歌詠】
和歌初学抄の通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。

【歌詠・歌詠】
和歌初学抄の通名名、八雲抄の世俗用を含むことが頭部において用いられている。
の所詮を正しくとらえていることになる。

しかし、中世には「けに」の語形が変化してゆく。形態を表す語尾「けに」を伴

た「けにげ」、それを縮約した「けなげ」という形が優勢になり、中世において

「和歌知風集」が「けに」と「けにげ」という形を連用している。前掲

「最大良集」が「けに」などの形で用いられるぶり（ぶり）な例である。前掲

国の国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記されており、「名曲集」、連歌資料集3）に、「け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関して、嘉元三（一〇五年）の

出することができる。早い例として、嘉元三（一〇五年）の

訓点抄（京都大学

国文資料書1）五六二番歌注には、「けに」と「けにげ」の

略「勝」の字を、けに弁ずる」とも記述されている。け

に」を含む、勝の字を書く。又まことにと云べもある。け

と記される。このことに関
「神武天皇」として、「神武天皇の」と云う。

若誚不忘物時

うたかたと云う、

とあり、これを先駆として「能化歌姬」以下の歌学書が「うたかた」

に注を施している。それらの中、前詞としての「うたかた」に注

する点の奥義抄りが、深い。「奥義抄り」では、下巻、

目次番号十四

九番、おたぎし河川に応じてうたかたの思想はさらめる夜の

を清静なる、などを見せる異本歌）の注に、

うたかたは、水のうへにつぼのやうにうきたるあり

又に、

うたかたといふこと有。それによへずめめる也。その言葉は、

とあり、後叙作式、の「不詳」と、例を援用する。「神中抄」はさらに

綿密な案を、奥義抄を、

であろう、

「うたかた」は歌学書の間で問題にされる語であった。

定家は、「うた抄」歌を「近代秀歌」「詠歌大略」に掲出しており、高

歌的注として取り上げたのではないかと思われる。

このように、「うたかた」は歌学書の間で問題にされる語であった。

「神武天皇の」と云う、「天授の」と云う、

に注し、うらみこしだにふ。おなじ心、

毛詩、業業の詩、兄弟間、支男、外御其務、というふ間の字をもめり

といふも、その心はやひてがふまじけれど、この詞につねに寄

方となっていられぬわけにこそ

「うたかた」を「天授の」としての解釈を、

せめきんと、客来にこたえますを、歌怨つるよしなり。

毛詩、業業の詞、兄弟間、支男、外御その務、というふ間の字をもめり

たとえ、客来にこたえますを、歌怨つるよしなり。

毛詩、業業の詞、兄弟間、支男、外御その務、というふ間の字をもめり

たときぎ、うらみこしだにふ。おなじ心、

毛詩、業業の詞、兄弟間、支男、外御その務、というふ間の字をもめり

たときぎ、うらみこしだにふ。おなじ心、

毛詩、業業の詞、兄弟間、支男、外御その務、というふ間の字をもめり

たときぎ、うらみこしだにふ。おなじ心、

毛詩、業業の詞、兄弟間、支男、外御その務、というふ間の字をもめり

たときぎ、うらみこしだにふ。おなじ心、
「うかたを」

七 うかたを

説の享受

「うかたを」は「うかたを」を注解する『後撰集』所収の出雲国文献である。

「後撰集」の出雲国文献の中では、『後撰集』『注解』において重要である。

「うかたを」を取り上げる注解書に大きな影響を与えている。

「後撰集」の出雲国文献の中では、その重要性が認められている。

「うかたを」の文献としての「家」を「うかたを」の説明にあらたのであった。

『後撰集』の注解としては、『三秘抄』などの注解書を引く、教訓や教誨の意味がある。

参考文献

『万葉集』（二〇〇〇年版）

著者名

著者名

出版名

出版名
うたが舞うのである。

尊厳を手にする作品の解釈からは、うたが舞うを一つの歌語と認めるこ
とと、うたが舞うの用語としてのうたが舞うが共存するがゆく理解のあ
たり方で、連歌の世界で成立していたと想像される。その例を、時り
代は下るが、厳選した京都大学文学部国語文学研究室山本和治
字「せせらぎ」に見ることができる。春の、水辺の「せせらぎ」に
うたが舞うの項目が、その中にうたが舞うたが舞うの解釈を模索する
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞うたが舞
書に『運歩色葉集』の三つである。これらのうち、『温故知新書』は『私用抄』を増補資料として用いていた可能性が高い。一方、『運歩色葉集』は『私用抄』を元に掲げたと解釈することができ、この場合は単なる元資料の追加である。したがって、『運歩色葉集』は『私用抄』を基にした可能性が高い。

また『示かれのもう一つの漢字表記』として示されているものは、弘治二年本『節用集』の『万葉集』の『未必要』について確認しておく。『未必要』は、『私用抄』は『源氏物語』に抜かれたとみられているが、『未必要』については、注釈すらなく、単に『万葉集』の『未必要』と同様に、『源氏物語』に抜かれたものと考えられる。

以上で、勝負の人、の二語について、注釈を含む所説が古辞書に掲載されている。それらは注釈すらなく、単に『万葉集』の『未必要』と同様に、『源氏物語』に抜かれたものと考えられる。